

令和 3 年度  
千葉大学国際教養学部  
学位記伝達式式辞

令和 4 年 (2022 年)3 月 23 日

本日ここに学士 (国際教養学) の学位を取得し、卒業を迎えられた皆さんに、国際教養学部の教職員を代表して心よりお祝いを申し上げます。また、みなさんの成長を見守り、応援してこられたご家族や関係者の皆さまにも深甚なる敬意を表します。新型コロナウイルスの影響が卒業式や学位記授与式に影響を与えるのは 3 年目となりました。まだまだ、先を見通すことはできませんが、およそ百年前、1918 年に大流行したスペインかぜも 1920 年頃には終息したことを考えると、そろそろ「終わりの始まり」について語るができるかもしれません。

この春は、ロシアのウクライナ侵攻のニュースに取り囲まれており、すでに侵攻後 1 か月が経過しようとしています。ここで、ウクライナ情勢の詳細を語ることはいたしません。皆さんがこの先も直面するであろう、世界情勢の激変にさいして、どのような態度を取るべきか、どのようなことを考慮に入れるべきか、いささか私の考えを述べておきたいと思えます。

第一の問題は、皆さんはウクライナという地域について、どれほどのことを知っているのか、という問題です。ウクライナ共和国は、小麦生産を特徴とする大穀倉地帯、石炭と鉄鉱資源に恵まれた重化学工業地帯、1922 年にソ連が出来たときの最初の構成国の一つ、東方正教会の信者が 72 % を占めるが、14 % の東方統一教会 (Uniate, Greek Catholic) の信者がいる複合宗教の地域、東スラヴ語の一つであるウクライナ語が公用語であるが、人口の 17.3 % をロシア人が占める、このロシア人のおよそ 3 分の 1 がウクライナ語を準母語とする、1986 年のチェルノブイリ原子力発電所の事故でも知られる、といったところでしょうか。ウクライナとはどういう地域なのかをまず知ることが大切ですし、ウクライナとロシアは截然と二分できるものではない、ということを知る必要があります。二項対立の図式はたしかに分かりやすいかもしれませんが、事柄の実際・実態を理解する妨げとなります。

第二の問題は、私たちの中で冷戦の発想が克服されているのかどうか、という論点です。冷戦体制の形成に向かっていて 1949 年に成立した NATO (北大西洋条約機構) とい

う軍事同盟は、1991年のソ連の解体後30年のあいだに、東ヨーロッパ、バルカン半島の諸国やバルト三国に拡大し、新たな加盟国は14か国に及びます。ロシアから見れば、自国の西部がほとんどNATOに加盟し、これにウクライナという大国が追随すれば、自国の安全保障をはかることができないのではないかと考えたのでしょうか。もとより、このロシアの考えは侵攻を正当化するものではありませんが、ロシアから繰り返しウクライナの「中立化」について語られているのは、その危機感を示すものだと言えるでしょう。ここでも物事の背景(バックグラウンド)を十分に知ることが大切なのです。冷戦終結後に生まれた皆さんは、本当に冷戦の発想から免れていると自信をもって言えるでしょうか。

第三の問題は、武力の行使という力の論理を否定するために私たちは何を考えることができるのか、何を為すことができるのか、という論点です。「戦争には戦争を」という考えが、際限のない暴力の連鎖を引き起こしてきたことは、私たちが歴史の中でこれまで経験してきたところです。私は、国際教養学部における学問は、すべて、こうした力の論理を否定するために存在していると考えています。

ドイツの作家トーマス・マン(Thomas Mann)は「戦争は平和の諸問題からの臆病な逃亡に過ぎない War is only a cowardly escape from the problems of peace」と述べました。物理学者のアインシュタイン(Albert Einstein)は「平和は武力では維持できない。平和は、理解によって初めて実現できる Peace cannot be kept by force; it can only be achieved by understanding」と言っています。私たちは戦争に取り囲まれているからこそ、平和の意味を再考する必要があると思います。対話と理解を言葉として訴えることは容易いかもしれませんが、問題は対話と理解をどう実現するかにあります。

パンデミックしかり、ウクライナ情勢またしかり。このような混沌とした時代、危機の時代にこそ、皆さんがこれまで学んできたこと、また、これから学ぶことの意味が問われる、と自覚することが必要です。社会においては、大学で学んだことがそっくりそのまま役に立つということはありません。皆さんは、これから様々な課題に直面し、その中には人間にとって未知の課題も多くあるに違いありません。国際教養学部で行ってきた課題解決型の学修は、物事をただ自分の外にあるものとして認識するのではなく、解決すべき課題として捉えること、また、実際にその解決に主体的に取り組むことに本質があります。プラクティカル practical というのは、実際の、実践的な、実用的な、という意味を持ちますが、私は国際教養学部の学びはプラクティカルなものと考えてきました。皆さんのこれから生きる場で、皆さんの持ち場で、是非、目の前に否応なく現われるであろう課題の解決に取り組んでいただきたいと思います。

皆さんがこの学部で学んできた過程は、さまざまな先生方、職員の方々、先輩、同輩、後輩の諸君によって支えられてきました。このつながりは、今後もけっして途絶えること

はありません。何か意見を聞いてみたい、考えるきっかけが欲しい、と皆さんが思うことがあったら、ぜひこの学部や同窓会に問い合わせして下さい。未来の教職員や仲間たちが必ず皆さんを支えてくれることでしょう。

以上をもちまして、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠におめでとうございます。これからの皆さんのご活躍を心から期待しています。

千葉大学国際教養学部長 小澤 弘明